

毎日新聞 年年歳歳

○春のこころと糖尿病

平成 26 年 3 月 30 日

桜の季節です。世の中に絶えて桜のなかりせば春のこころはのどけからまし。満開の桜がいつ散るかいつ散るか悩ましい、いっそ桜がなければのどかに過ごせるのに。桜を愛でる歌です。

糖尿病の方が日本にはたくさんいらっしゃいます。この病気は食事や運動療法、そして薬で、何とかコントロールできます。しかし逆に放っておくと、合併症で辛いことになってしまいます。

私が医者になった頃の 30 年前、糖尿病の飲み薬は、ほぼ一種類だけでした。糖尿病は膵臓（すいぞう）から出るインスリンというホルモンがうまく働かなくなると、血糖が高くなります。この薬は膵臓を頑張らせます。ところが、膵臓のお尻をひっぱたきながら頑張らせるので、ついには膵臓が音を上げてしまい、返ってコントロールを悪くしてしまうことがありました。

今は糖尿病の飲み薬はいっぱいあります。数え方で多少変わりますが、全部で 7 種類ほどです。一番新しい薬は血糖の高い時だけ効いて、低い時は知らん振りをしています。パチンコのチューリップが開いている時に玉がよく入る要領です。

その他の薬も良くなりました。膵臓を頑張らせるのに、お尻をひっぱたくなると乱暴なことはしません。膵臓の機嫌をとりながら、そして膵臓のお尻をさすりながら、頑張らせます。別の薬は余った糖分を肝臓になるべくたくさん運んでやります。腸からの糖分の吸収を遅らせる薬もあります。体のあちこちでインスリンの効率を良くする薬もあります。とにかくいっぱいあります。インスリン注射も良くなりました。

これだけたくさんの薬があるのは、患者さんにとっても私たちにとっても幸せなことです。ただ、治療が簡単になったわけではありません。10 人の糖尿病の方がいれば、10 種類の糖尿病があります。それぞれの方に合わせて薬を使い分けます。ここが腕の見せ所であり、昔でいう医者さじ加減です。

そのために、私たちは一所懸命に勉強しなければなりません。論文をたくさん読み、講演会にも出席します。いつまでたっても、日々勉強です。治療のためにいろんな事を考えなければならず、悩ましく、ついつい、全部の薬をすり鉢で混ぜて、使ってみたい誘惑に駆られてしまいます。

世の中に絶えて薬のなかりせば医師のこころはのどけからまし。満開を迎える桜を見ながら、医学の進歩と薬に感謝しています。

きたむら・よしあき

1956 年大阪生まれ。神戸大学医学部卒。姫路市にある書写病院院長。内科学会認定医、東洋医学会専門医。姫路市医師会副会長。医師会では医療介護連携、広報、医療安全、女性医師問題などを担当